

平成 25 年度第 7 回（通算第 60 回）

## 山口国際文化学会へのおさそい

### 「山口県立大学卒業生・大学院修了生は生きた器械になれるか」

教員世話人 安溪遊地 井竿富雄 進藤優子

院生世話人 呉暁良 中村彩佳 岡村理恵 張超超

日時 平成 25 年 11 月 27 日（水曜日）16 時 10 分より

場所 国際文化学部棟 C-12 教室

主催 大学院国際文化学研究科

発表者 井竿富雄 国際文化学研究科 教授

タイトル 「山口県立大学卒業生・大学院修了生は生きた器械になれるか」

#### 要旨

発表者は今年 8 月 31 日から 9 月 23 日までの期間、カナダ・ビショップス大学への短期語学留学学生引率と自身の英語研修を命じられた。実のところ、発表者はこれまで留学経験がなく、今回のカナダ派遣は全くのところ青天の霹靂であった。

近年は、英語の必要性が強調されるようになってきた。グローバル化という言葉もやや陳腐化した感がある。英語ができることはもはや特技ではなく、日常生活の一部が多言語・多文化化していることに慣れなくてはいけないというほどのものがあるように感じられる。英語の必要性は、吉田松陰が英語教育・留学の提案をしているほど古くからあるのだが、それでもどうしたものか第二言語には壁が高い。

今回発表者が経験したのは「イマージョン（Immersion、没入）教育」というものである。これは、英語のみの環境での英語教育である。具体的には、初級文法のさらに基礎から一度全部英語で教育を受けるというものであった。日本でも全編英語による講義が導入されている学校は存在している。しかし、キャンパスの外へ出れば日本語の世界である。カナダの場合、キャンパスの外へ出ても日本語の世界はない。24 時間イマージョン可能な環境では、どのような成果が上がるものなのか。そして、教育の結果どのように変化するものなのか。それは自身にとっても関心が持てた。

発表者は今回、自身の経験に基づきながら、海外での英語教育について考えてみたい。英語教育方法論などについては自身の専門領域とは異なるが、できるだけ今回の経験をまずは客観的にふりかえり、そこから取り出せる「国際文化学に資するもの」は何かを考えてみたい。

結論の一部を先取りすると、今回の研修においては、英語そのものもさることながら、教育方法のようなものに関しても得るところが大変大きかった。また、場所がカナダの中でも「フランス語が唯一の公用語」であるケベック州ということも、発表者にとっては鮮烈な体験であった。このような体験は、ひろく学内で共有できるようになってほしいと考えている。

※終了後 18 時から Yucca で、第二部として自由なトークを展開できる場（山口国際文化学 SALON）を準備しております（有料）。こちらも皆様の積極的なご参加をお願いいたします。